

最優秀賞

命の重さ



鹿島中学校 三年

宮 本 陽 菜

この作品は、第四十三回
少年の主張福島県大会
優良賞受賞作品です。

「死にたい。」

最近、よくこの言葉を耳にします。それを聞くたびにとても胸が痛くなります。簡単に口にする人がいますが、決して容易に使っていい言葉ではありません。

私が中学一年生の時、入院していた父が、集中治療室に運ばれたと担任の先生に言われました。私はすぐに支度をして、迎えに来た祖父母の車に乗せられて病院へ行きました。車に乗っている間に、ずっと「死なないで」と祈り続けていました。病院に着くと、母や親戚の人が集まっていました。しばらくすると、少し落ち着いたからと病室に入ってもらえました。すると母が、「陽菜はしっかりしている子だから、自分がどうなっても安心できる。」と父が集中治療室に入る前に言っていたと教えてくれました。それを聞

いて私は、「まだ生きているのに何を諦めているんだ。」と思いました。これからも一緒に生きていくんだ、そう思いながら声をかけ続けました。その願いが届いたのか、父は一命をとりとめました。そうして父は福島市の大きな病院から、家の近くの小さな病院へ転院しました。

私は、父は回復に向かっているんだ、もう少ししたら家に帰ってこられるんだと嬉しくて仕方がありませんでした。それからしばらく、学校が終わったらすぐに病院へ向かい、父の世話をする日々が続きました。母も仕事が終わってから夜遅い時間に病院へ向かいました。そんな生活が繰り返されるうちに、私も、母も、心身ともに疲弊していききました。学校と病院の往復は、予想以上に大変なものだったのです。

やがて、私は悔やんでも悔やみきれない経験をする事になります。

私はいつも通り学校が終わって病院に来ていました。その日は学校で嫌なことが重なり、私はとても苛立っていました。そして、ついその怒りを父にぶつけてしまったのです。すると、父は突然泣き出してしまいました。滅多に見ない父の泣き顔に私が動揺していると、「辛い」「もう死なせてくれよ」と父は絞り出すように言いました。その言葉に、私は声が出なくなりました。同時に、とてつもない罪悪感が胸に押し寄せてきました。「なんてことを言わせてしまったんだろう」「すぐ謝らなくちゃ」と私は思いましたが、声が出ず、体も動かないのです。それほどに、自分の犯した罪が重かったのです。

しばらくして父は泣き止み、私に、「こんなこと言ってごめん」と謝りました。謝らなければいけないのは私なのに。私は自分がとても情けなくなり、泣きながら謝りました。そんな私を、父は快く許してくれました。でも、胸の奥に残った罪悪感が消えることはありませんでした。

そして私が中学二年生になった五月、父は家に帰ることなく、病室で亡くなりました。最期まで、私の前では明るく振る舞ってくれていました。

先日のテレビで、私と同じ年の少年が「人を殺したかった」という理由で男性を刃物で襲い、逮捕されたというニュー

スを目にしました。私はそのニュースを見て、行き場のない気持ちでいっぱいになりました。生きていたくても生きられない人もいるのに。命をそんなに軽く扱わないでよ。そういった思いがふつふつと込み上げてくるのと同時に、私も父に、自分の命をぞんざいに扱わせてしまったことを思い出しました。形は違っても、過ちの重さはほとんど同じなのではないかと思いつめてしまいました。

私のこの記憶は消えることはありません。「死なせてくれよ」と言わせてしまったあの瞬間を、これからも忘れることなく生きていくのでしょうか。どうか、この発表を聞いてくれた人は、命を大切にしてください。自ら命を絶とうとしている人、世界に一つだけの、あなたの大切な命の灯火を消さないでください。あなたのことを大事に思ってくれる人は絶対にいます。だから、命を諦めないでください。

例えば、今いじめを受けて自殺を考えている人は、いじめてくる相手のために、あなたの命を終わらせる必要はありません。生きてさえいれば、楽しいことや嬉しいことが、これからたくさん見つかります。あなたは一人ではありません。私はあなたの味方です。

最後に言いたいことがあります。簡単に「死にたい」と言う人は、もう一度しっかりと考えてみてください。命の重さを。